

はれの故郷

岡山のDNA

田畑や川に囲まれた岡山市郊外の病院の地下室。窓のない70平方メートルのこの部屋に、世界とつながる「窓」がある。

「AMDA」。世界各地で医療支援を続ける国連認定NGOの本部だ。

机に並んだ4台のファクスやパソコンには、世界の紛争地や被災地からも英文の書類やメールが次々と飛び込んでくる。

階段を上がった1階の診察室では、内科医として患者に向かい、地下の本部では、AMDA代表として「世界の患者」と向き合う。こんな生活を20年近く続けている。

医療で和平 一歩ずつ

「神の見えざる手があった」。何かに導かれるようにして歩いてきた人生だという。

「シニバイツアーもいんじゃないか。高校3年の時、父の何げない一言で、文系志望だったが、医学部も受験。私大の法学部と岡山大学医学部に合格し、授業料の安い岡山大を選んだ。医者の道に入ったのが偶然なら、海外に目を向けるようになったのも偶然。当時は大学紛争が激しく、休講が多かった。海外旅行チームもあり、大学4年の89年、マレーシアやタイ、イランなどアジア12カ国を10カ月かけて放浪した。

国際貢献 菅波 茂さん(56)

⑦

すがなみ・しげる 46年12月29日、広島県神辺町生まれ。岡山大学医学部在学中から、アジアへの医療支援活動に取り組み、84年にAMDAを設立。81年に岡山市に菅波内科医院(現アスカ国際クリニック)を開業。02年8月から県の「岡山発の国際貢献を考える会」委員。

国際貢献の分野では、加茂川町が94年、町ぐるみで国際貢献に取り組む全国初の国際化推進条例を制定。哲多町は01年、AMDAと協力し、国際ボランティアを育成する「公設国際貢献大学校」を開校した。

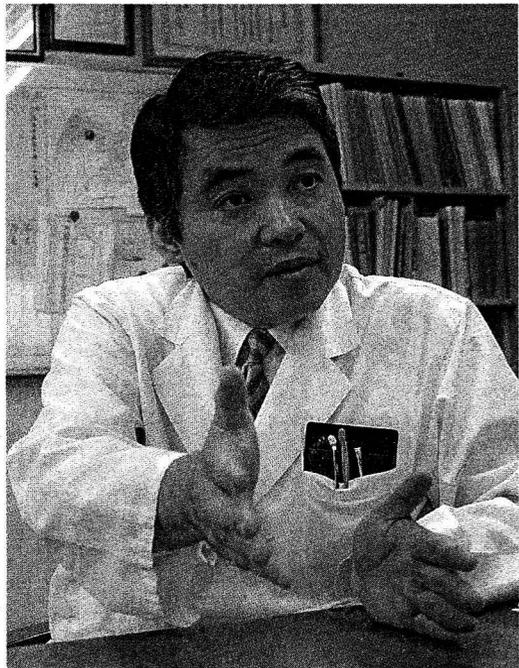
芳井町出身の内山完造は、魯人ら中国の知識人と交流、戦後の日中友好協会創立にも尽くした。倉敷市の元陸軍通訳永瀬降は、タイ・ミャンマー間の秦細鉄道建設で死亡した連合国軍捕虜の慰霊活動で、英政府から感謝状を贈られた。

「医者」と「海外」。二つを「くれ」と頼まれた。10診察所をつくりました。来つこの偶然は翌70年、一つの0人以上が詰めかけ、回数も増え来てくださる。「国際貢献」となると実を虫、きょう虫な三重三重誰かの役に立てるといってに寄生虫が見つかった。日とが、新鮮でうれしかった。活動のための寄付集めに本では考えられないような衛生環境に驚いた。マリリで、「今後はどうする」とアも発生する危険地帯だったことは後で知った。

ワイ河の開拓農場に演奏会に出かけた。「医者や医学部生がいるなら検診もやっ」たことは後で知った。帰国後、農場主から手紙が届いた。「保健委員会と調査も含め約10年通った。」と答えざるを得なくなつた。結局、この農場には

弱者に共鳴の風土

AMDA育てた



地球上で尽きない天災、貧困、紛争…。「救える命があれば、AMDAはどこへでも行きます」＝岡山市橋津のAMDA本部で

医師になって3年目の79年。カンボジアで誕生したボル・ポト政権による大量虐殺で、タイとの国境に難民が殺到した。

「紛争による緊急支援が必要となる地域を広げないためにも、医療支援で小さな平和を積み上げていきたいです」

そのためにも国内でやる必要がある。口癖になった「西のジュネーブ、東の岡山」の表現だ。

市民のボランティアパワーとAMDAの活動を核として、岡山に民間の人道援助機関を集積させるという構想だ。手応えは十分感じている。

95年の阪神大震災では、被災地でのボランティア活動に多くの岡山県民が駆けつけた。2万人超の死者を出した01年のインド西部地震では、AMDAの急な協力呼びかけにもかかわらず、衣料や食料など救援物資が大量に寄せられ、3日間でチャーターした貨物車を満杯にした。

「弱者が存続の危機に立たされた時、何とか助けようとするのが岡山。弱者に共鳴できる精神風土は財産ですよ。だからAMDAも続けられた」

神が与えた約束の地が岡山だった。そう信じている。(敬称略)